

平成25年度 文部科学省いじめ対策等生徒指導推進事業

# 不登校の居場所における子どもたちの 過ごし方と進路選択の過程

平成26年3月

特定非営利活動法人 フリースクールみなも

稲垣 貴大

今川 将征

宇陀 寿美恵

## はじめに

不登校問題を支援するための取り組みは、公立の適応指導教室や NPO 法人等民間において現在も様々な所で行われている。そして不登校の子どもや高校中途退学者の支援形態として、とりわけ民間のフリースクール等でよく採用される方式に「居場所」と呼ばれる形式がある。この方式は不登校の子どもが元気を取り戻すために最適であることが、支援者の経験則では把握されており、また当法人も採用している。

しかしその一方で、その有用性の証明について、支援者の経験則に頼りきっている側面があり、理論的な考察は決して多くない。そこで本調査においては、「居場所」という機能の有用性を質的研究により調査し、それが持つ機能、不登校の子どもたちに与える影響を明らかにし、今後の不登校の子どもたちに対する活動をより充実させることを目的とした。当法人内でその結果をフィードバックするのはもちろんのこと、これをご一読いただいた支援者の方々にも、その結果を少しでもご参考としていただければ、幸いである。

特定非営利活動法人 フリースクールみなも  
理事長 今川 将征

## 不登校の居場所における子どもたちの過ごし方と進路選択の過程

### 1 問題

#### 1-1 不登校の現状

文部科学省(1998)は、不登校について「年間 30 日以上長期欠席者のうち『何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因や背景により登校しない、あるいはしたくてもできない状況にある状態』」と定義している。不登校の児童・生徒数も増加のピークを迎えた 2001 年から微減しつつあるものの、現在でも高い水準を維持したまま横ばいの状態が続いている。文部科学省初等中等教育局児童生徒課(2012)の発表によると、2011 年度の小学校の不登校児童数は 22622 人、中学校の不登校生徒数は 94836 人、高校の不登校生徒数は 56292 人であった。前年度にあたる 2010 年度と比較すると、中学校の不登校生徒数は 2592 人減少しているが、小学校の不登校児童数、高校の不登校生徒数はそれぞれ 159 人、585 人増加している。このことから、不登校に対する取り組みは依然課題として継続していることがわかる。不登校の子どもたちがどのようなニーズを持ち、どのような支援が必要なのかを把握し、よりよい支援を考えていくことが求められていると考える。

#### 1-2 フリースクールの成り立ちと役割

##### 1-2-1 フリースクールの性格

フリースクールは多義的である。吉井(1999)は、狭義のフリースクールとして、「1960 年代後半から 70 年代にかけて、イギリス・アメリカ・ドイツ等で、主として大都市に現れた小さくてラジカルな、そして無認可で通学制の学校」に類するタイプのものをさしているとした。世界的にはフリースクールは、欧米における国家の公教育に対し、それとは異なる教育理念をもち、実践する人々の活動から誕生した。当時の公教育で実施されたとされる、規律を重んじ、肉体的・精神的に活動を強制される教育への批判から設立されたため、多くのフリースクールは子どもの自発的な行動や判断を徹底して認めるといった特徴をもつようになった。日本のフリースクールもこうした特徴をある程度は備えているが、むしろ不登校生を受け入れる民間施設という側面が強調されている。吉井はこの「不登校の受け入れ」という特徴に着目し、日本のそれを「日本版フリースクール」と称している。

##### 1-2-2 フリースクールの機能

吉井は、フリースクールを大きく 3 つに分類している。不登校生・中途退学者の居場所を提供する「不登校問題志向型」、既存の学校とは違う新しい教育の理念と方法を掲げる「新しい教育志向型」、補習・進級・進学のための学習をサポートする「学習サポート志向型」である。そしてまず、1980 年代半ばに設立された「日本版フリースクール」は「不登校問題志向型」であった。この背景には 1970 年代、80 年代の日本の受験競争や管理教

育の激化による不登校の増加がある。こうした「日本版フリースクール」の背景としてNPO法人フリースクール全国ネットワーク(2009)は、不登校の子どもたちが、学校を休むまでもに苦しい思いや不安・不信感を感じ、不登校が始まってからも不登校を理解されず、学校へ戻そうとする辛さを味わい、そのような価値観の中で自責感や罪悪感に苦しんでいることを指摘している。そのような状況下におかれた子どもたちのために居場所・学び場・活動の場が必要とされるようになり、既に欧米に存在していたフリースクールをモデルに「日本版フリースクール」が誕生した。1990年代になるとフリースクールは徐々に不登校の子どもたちやその保護者に受け入れられるようになり、フリースクールの数も増加した。また、文部科学省もフリースクールへの出席によって学校を出席したことのできるという認識を示し、フリースクールに通う小中学生の通学定期取得が実現したりなど社会的な認知度も上昇した。

その後、次第に「新しい教育志向型」も加わった。2001年には、子どもの育ちは多様であることが望ましく、子どもに合うものが選択できるような社会をめざし、子どもの最善の利益と学び・育つ権利を保障するために活躍する全国のフリースクール・フリースペース・ホームエデュケーションの連携を図る前述の「NPO法人フリースクール全国ネットワーク」が設立されている。2013年現在、60以上のフリースクールなどが加盟している。これらのフリースクールは、既存の教育制度にとらわれることなく、独自の教育理念のもとに様々な活動を行っている。「学習サポート志向型」のフリースクールでは、不登校の子どもたちに教科学習を行い、学校のカリキュラムに沿った学習が行われていることが多い。指導形態は多くが個別指導である。中には、通信制・単位制の高校と連携し、高卒資格を取得できるフリースクールも存在する。

しかし、上述の「日本版フリースクール」は多義的で定義も曖昧であるため、必ずしも上記の3つで十分に機能別に分類できているとはいえない。フリースクールあるいはフリースクールを名乗る団体の中には、何らかの力によって矯正させるようなものも存在し、中には問題を起こすこともあった。例えば京都府船井郡京丹波町に所在した「丹波ナチュラルスクール」では、2008年に経営者らが、入所していた不登校やひきこもりの子ども・若者に対して日常的に暴行を加えていることが発覚し、事件として取り上げられた。丹波ナチュラルスクールは自身でフリースクールと名乗っていたわけではないが、事件当初「フリースクール」という報道がなされたことから、不登校の子ども・若者が通う施設が広く「日本版フリースクール」と認識されうる状況であることが伺える。

### 1-2-3 フリースクールに通う子どもたちの様子

前述の通り、「不登校問題志向型」のフリースクールは、不登校生・中途退学者に居場所を提供しようとしている。藤原(2010)は、居場所の定義として「①社会生活の拠点となる物理的な意味での場」「②自由な場」「③居心地がよく、精神的に安心・安定してい

れる場」「④一人で過ごせる場」「⑤休息、癒し、一時的な逃避の場」「⑥役割が与えられる、所属感や満足感が感じられる場」「⑦他者や社会とのつながりがある場」「⑧遊びや活動を行う場、将来のための多様な学び・体験ができる成長の場」「⑨自己の存在感・受容感を感じさせる場」「⑩安全な場」という10の類型を挙げており、「フリースクール」・「フリースペース」がここで論じられる居場所として捉えられるようになったことにも言及している。

「NPO法人フリースクール全国ネットワーク」に加盟しているフリースクールでは、学校のように年齢によってクラスが分けられることはない。そのため、常に異なる年齢の子どもたちが共に活動を楽しんだり、活動を通して学んだりすることができる。また、これらのフリースクールにおける活動には、原則的に強制参加のものは存在しない。むしろフリースクールでは、おとなの強制や期待に従うことよりも、「自分は何を感じているのか」、「自分は何をしたいのか」を考え、それを表明することを重要視している場合が多い。スタッフの立場から日々様子を記したものとフリースクールで活動する子どもたちの手記などのフリースクールの資料においても、子どもたちがフリースクールに通いながら、元気になっていく様子が記されている。

一方、子どもたちはいずれフリースクールを卒業し、在籍している学校に復帰したり、進学・就職したりしていかなければならない。実際に、癒しともなる居場所であるフリースクールに永遠にとどまろうとしないで、積極的に進路選択をし、フリースクールを卒業していく子どもたちが存在している。吉井(1999)はこの点について、フリースクールでは仲間との自由かつ率直な交流が行える時間、空間、関係が保障されており、それによって自己肯定感を次第に回復して関心の焦点を子どもの内界から外界へと転換し、さらに友人関係の広がりや達成感を満たす活動を求めて、自己決定を経た上で進級・進学・社会参加へとすすむことを指摘した。しかし、フリースクールのどのような機能や関わりが子どもたちにどのような影響を与え、変化を経ているのかは明らかにされていない。子どもたちの進路の選択過程と関連付けながら、このようなフリースクールの不登校支援の有効性を議論するにあたっては、その際の子どもたちの変化のプロセスに関する理論を生成する必要性があるといえるだろう。

### 1-3 不登校対応に関する文部科学省の認識と現状の問題

文部科学省(2003)は、「不登校対応の在り方について」という通知を公表し、不登校に対する基本的な考え方として以下の5点を言及した。1点目は「将来の社会的自立に向けた支援の視点」である。不登校の解決の目標は、児童生徒の将来的な社会的自立に向けて支援することであり、不登校を「心の問題」としてのみとらえるのではなく、「進路の問題」としてとらえ、本人の進路形成に資するような指導・相談や学習支援・情報提供等の対応をする必要があるという認識を示した。2点目は、「連携ネットワークによる支援」

である。学校、家庭、地域が連携協力し、不登校の児童生徒がどのような状態にあり、どのような支援を必要としているのか正しく見極めるためのアセスメントを行い、適切な機関による支援と多様な学習の機会を児童生徒に提供することが重要であり、その際には公的機関のみならず、民間施設やNPO等と積極的に連携し、相互に協力・補完し合うことの意義が大きいという認識を示した。3点目は「将来の社会的自立のための学校教育の意義・役割」である。義務教育段階の学校は、自ら学び自ら考える力なども含めた「確かな学力」や基本的な生活習慣、規範意識、集団における社会性等、社会の構成員として必要な資質や能力等をそれぞれの発達段階に応じて育成する機能と責務を有しており、関係者はすべての児童生徒が学校に楽しく通うことができるよう、学校教育の一層の充実のための取組みを展開していくことがまずもって重要であるという認識を示した。4点目は「働きかけることや関わりを持つことの重要性」である。児童生徒の立ち直る力を信じることは重要であるが、児童生徒の状況を理解しようとすることもなく、あるいは必要としている支援を行おうとすることもなく、ただ待つだけでは状況の改善にならないという認識を示した。5点目は「保護者の役割と家庭への支援」である。保護者を支援し、不登校となった子どもへの対応に関してその保護者が役割を適切に果たせるよう、時機を失することなく児童生徒本人のみならず家庭への適切な働きかけや支援を行うなど、学校と家庭、関係機関の連携を図ることが不可欠であるという認識を示した。

以上から、文部科学省は不登校の対応において、学校教育内部のみで解決できると認識しておらず、多くのフリースクールがNPO法人として運営していること、実際に学校長の裁量によってフリースクールに通っている児童・生徒に出席認定をしたケースも存在していることなどから、その主たる連携先の重要な1つとしてフリースクールが該当すると我々は考えた。「働きかけることや関わりを持つことの重要性」については、これまでの先行研究や不登校を経験した子どもたちの手記などから、フリースクールが不登校の子どもたちに対してさまざまな取組みを行っている。例えば、佐藤(2002)は、神奈川県横浜市にあるフリースクール「楠の木学園」の取材を通して、フリースクールがどのような教育活動を通じて子どもたちの「道」を切り開こうとしているのかを調査した。その調査によると、同フリースクールは、自らの力で取り組ませる、失敗を否定せず、受け入れる、職場実習の推奨などの教育方針をもち、その活動を通じて、当初学園に来るだけでも精一杯だったり、1日中ふさぎ込んでいたりした子どもたちが、活動を続けるうちに態度が堂々とし始めて、生き生きとしてくることを示している。「保護者の役割と家庭への支援」についても、フリースクールは不登校の子どもをもつ親の交流を促し、親の孤立を防ぐ「親の会」などを定期的で開催しており、積極的に保護者支援を行っているといえる。

一方、「将来の社会的自立に向けた支援の視点」については、前述の2点と比較してフリースクールの取組みとしてあまり言及されておらず、そのような視点からフリースクールを捉えようとした研究は相対的に少なかった。また、前述の通り、文部科学省は不登

校を「進路の問題」と捉えることの必要性を認識しているため、本研究もそれに従い、進路選択の視点を本研究の中にも含めることにした。

#### 1-4 フリースクールみなもの概要と取り組み

フリースクールみなものは不登校の子どもたちの支援の場を作るため、2004年11月より大阪府で活動しているフリースクールである(2005年7月にNPO法人格を取得)。フリースクールみなものは、前述の吉井による「不登校問題志向型」であり、居場所の形態としては、藤原による「居場所」の定義に合致している。これは開設したスタッフが、他のスクールのボランティア等を経験した結果、「居場所」の機能が不登校の子どもたちの状態向上に最適であると、経験的に感じたことから採用された。

また、始めは「居場所」の機能(13:00~20:00)のみでスタートしたが、少しずつ学習サポートのみの時間(11:00~13:00、スタッフが2名程常駐し、子どもは来たい時に来て、適宜個別指導を受けられる)や、通信制高校との提携事業等も開始された。そして今年度、本調査と平行して、高校生年齢以上の子どもたちの学習支援(主に講義形式、各授業週1回)が、より体系的に行われることとなった(以下、これらを総称して学習の時間と呼ぶ)。

## 2 目的

本研究では、フリースクールにおける子どもたちの入会から卒業までの変化に着目する。何らのきっかけでフリースクールに通うようになった子どもたちが、進路選択を行い、卒業するまでのプロセスとフリースクールの特徴や機能がそのプロセスにどのような影響を与えているのかを質的に分析する。

本研究では、第一に、子どもたちが進路を見つけて卒業に至るまで、フリースクールにおいてどのようなプロセスを経ているのかという全体の傾向をモデル化する。第二にこれらを踏まえて、フリースクールにおける不登校支援において必要なことは何かを考察する。

## 3 方法

### 3-1 研究方法

#### 3-1-1 調査方法

本研究では、フリースクールの卒業者を対象に、半構造化面接法によるインタビュー調査を行う。半構造化面接は、個々の回答者が独自の世界観を有していることを前提とし、回答者の世界観やテーマに関する新しい着想に対応しやすい調査法である(Merriam 1998)。そのため、研究協力者が個々の進路の選択過程を比較的自由に語ることを期待できる。

### 3-1-2 分析方法

#### 3-1-2-1 修正版グランデッド・セオリー・アプローチによる分析

本研究では、修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いて分析を行うことにした。木下(2007)によると、M-GTAは、概念やカテゴリーを生成する分析過程の中で、被援助者がどのようなニーズを持っているのかが明らかになっていくため、健康問題や生活問題を抱えた人々に専門的に援助を提供する実践的なヒューマン・サービス領域の研究に適しているといわれている。フリースクールも不登校問題に対する支援を行っていることから、フリースクールの活動もその一領域であるといえ、M-GTAが本研究の方法として適していると筆者は判断した。また、フリースクールは、子ども同士の社会的相互作用が重要な意味を有していると考えられる。フリースクールでは、スタッフが子どもを一方向的に制御することなく、スタッフから子どもへ、子どもからスタッフへという双方のやり取りによってさまざまな活動が行われており、その活動内容も変化し続けている。M-GTAは質的研究法の中でもこうした変化の様態を捉えることができ、さらにそうした変化について解釈を行っていくことができるといわれている。以上の点から、筆者は本研究をM-GTAによって分析することが適切であると判断した。

### 3-2 研究協力者の基本属性

Table1 予備調査協力者の基本属性

名前	年齢	性別	フリースクールに通った期間	卒業後の進路
①	23歳	女	中2～21歳	専門学校生
②	21歳	男	高1～高3	大学生
③	18歳	女	中1～高2	高校生

Table2 本調査協力者(子ども)の基本属性

名前	年齢	性別	入会時の学年・年齢	備考
a	16歳	男	中学2年生	高校進学を自ら志した。
b	非公開	女	非公開	女子
c	18歳	男	小学5年生	発達障害と診断されている。
d	19歳	男	18歳	大学進学を志した。
e	18歳	男	中学2年生	いじめが不登校の原因。



Table3 本調査協力者(スタッフ)の基本属性

名前	年齢	性別	勤務期間	特に支援した子ども
A	43歳	男	2011年～2014年	子ども a
B	26歳	女	2006年～	子ども b
C	57歳	女	2012年～	子ども c
D1	30歳	男	2011年～2014年	子ども d
D2	20歳	男	2012年～	子ども d
E	33歳	男	2004年～	子ども e

### 3-2-1 研究協力者の選定について

現在、フリースクールみなもに通っている生徒の中から、それぞれ異なるケースをもつ5人の子どもを選定した。(Table2の備考を参照。)加えて、その子どもと特に親しく、そのケースの対応にあたったスタッフやボランティアを選定した。

### 3-2-2 倫理的配慮

本調査は「フリースクールみなも」で行われた。研究協力者には、インタビューの前に個人情報の取り扱いや本研究の目的を説明し、プライバシーに配慮した。具体的には「本研究の研究目的を伝える」、「研究によって得た音声データ及び個人情報は、文部科学省およびフリースクールみなもの主要スタッフ以外には一切公表しないこと」を一人一人に伝え、個人情報の取り扱いを明らかにした。研究協力者の年齢、性別、フリースクールに通っていた期間、現在の所属・職業などは、許可を得た上で公開し、氏名については公開しないことで匿名性を保証した。また、インタビューで得た音声によるデータは、みなもの主要スタッフ以外には一切聴くことができないように管理し、逐語録を作成後に、データを削除した。

## 3-3 予備調査について

### 3-3-1 予備調査の手続き

本研究の目的を達成するにあたって、どのような質問をすべきかを検討すること、居場所の有用性とその他必要な支援についての仮説をある程度立てることを目的に、2013年9月～10月、フリースクールみなもの卒業生を対象に予備調査を行った。フリースクールみなもの面談室において、半構造化面接によるインタビュー調査を行い、M-GTAを用いて分析を行った。(詳しい手続き方法は本調査と同様であるため、そちらについては後述する。)質問項目は、「フリースクールに通うようになったきっかけ」、「不登校になってから

フリースクールに通うまでどのように過ごし方、「フリースクールでの過ごし方」、「フリースクールに通い続けられた理由」、「自分の進路を見つけるきっかけ」、「自分の進路を選択してからの過ごし方」などである。

### 3-3-2 予備調査の結果

#### 3-3-2-1 仮説の生成

M-GTAによって生成した概念を元に、以下の仮説を得た。

- ・目的の喪失、「普通ではない」ことへの後ろめたさ → 元気の喪失
- ・居場所の効能：他人との出会い・活動（≠家での一人での活動） → 後ろめたさの消失
- ・居場所での日常：他人とのコミュニケーション、対人関係での悩み → 成長
- ・次の進路へのきっかけ：元気を取り戻す → 行動力の上昇 進路への意識 → 卒業

フリースクールに通う前の子どもたちは、学校に行けないことの罪悪感やいじめなどによって、自分に対する評価が著しく低い状態にあった。また、学校に行けない自分に対して「普通ではない」と考え後ろめたさを感じていた。しかし、フリースクールに通い、スタッフや他の子どもと出会い、彼・彼女たちと活動することによって、上記の後ろめたさを徐々に消失させ、その活動範囲は徐々に拡大していくことが分かった。その中には辛い経験も存在していたが、最終的に子どもたちは、元気を取り戻し、「自分の行動力が上昇した」と思うようになり、さまざまなことにチャレンジできるようになっている。その一環として進路への意識も強化され、進路選択や学習を経てフリースクールを卒業している。

この点から、フリースクールみなもにおいて必要な支援として、大きく2つに分けられることが考察された。1つ目は「子どもの元気を回復するための支援」である。2つ目は「元気になった子どもが進路を見つけるための支援」である。本調査では、この2つの支援に着目しながら、順次インタビューを行うことにした。

#### 3-3-3-2 質問項目について

フリースクールみなもには「子どもの元気を回復するための段階」と「元気になった子どもが進路を見つけるための段階」があることが予備調査によって指摘できた。これを受けて、質問項目を「フリースクールに来る前に関する質問」・「フリースクールに来てから元気になるまでの質問」・「元気になってから進路選択・卒業に向かうまでに関する質問」・「これからの展望に関する質問」の大きく4つに分けた。「フリースクールに来る前に関する質問」では「みなもに来るようになったきっかけは何か」・「フリースクールみなも」を紹介したのは何か・誰か」・「不登校～みなもに来るまでどのように過ごしていましたか」を下位の質問として設定した。「フリースクールに来てから元気になるまでの質問」には、「みなもでどのように過ごしていたか」・「みなもで楽しかったことや辛かったこと」「1人でいたときについて」・「スタッフとの関わり、他のメンバーとの関わり」・「施設環

境について」・「みなもに来て解決されたこと・よかったと思うこと」を下位の質問として設定した。「元気になってから進路選択・卒業に向かうまでに関する質問」においては、「自分の進路を見つけるきっかけは何か」・「それはみなもとに関わりあるのか」・「みなもに来て昔と比べて変わったと思うことはあるか」を下位の質問として設定した。「これからの展望に関する質問」においては、「今後みなもでやりたいことは何か」・「みなもに望むこと・やってほしいこと」を下位の質問として設定した。ただし、インタビュー方法として半構造化面接を採用しているため、必ずしもすべての質問を行うわけではなく、状況に応じた質問を行う場合もあった。

一方、予備調査を受けて、自分の葛藤や苦しい経験を語ることや子どもたちの元気になる過程や成長、進路選択がフリースクールみなものどのような環境が関係しているのかを、子どもに語ってもらうことに限界があることが指摘された。そのため、本調査では、子どもたちの他、特に研究協力者らに関わったスタッフ・ボランティアに対しても、インタビューを行うことにした。質問項目については、「子どもがみなもでどのように過ごしていたか」・「スタッフ・ボランティアとして日常面・進路面・学習面の3視点から留意したサポート」・「スタッフから見て子どもが苦勞していたこと、葛藤していたこと」・「子どものモチベーション維持のための工夫ややる気がなくなったときなど子どもが苦しんでいる時の対応」・「子どもの変化で気づいたこと」を共通項目として設定した。同時に、前述の選定に応じて、個別の質問項目を設定した。Aさんには「好きなことを進路へ結びつけることについて」、Bさんには「女の子への対応について」、Cさんには「発達障害を持つ子どもへの対応について」、D1さん・D2さんには「学習面・受験指導について」、Eさんには「いじめられた子への対応について」をそれぞれ質問した。

### 3-4 手続き

#### 3-4-1 調査手続き

2013年9月～2014年2月、半構造化面接によるインタビュー調査を、フリースクールみなもの面談室で実施した。2013年9月～10月はフリースクールみなもの卒業生を対象に予備調査を行い、本研究の目的を達成するにあたって、どのような質問をすべきかを検討した。予備調査の結果をもとに質問項目の再検討を行い、2013年11月～2014年2月にかけて子どもたちやその支援に特にかかわったスタッフやボランティアを対象にインタビューを行った。面接場所はプライバシーが守られるように、会話が周囲に届かないこと、レコーダーで音声記録できる程度に静かな場所であることを基準に選定した。面接時間は1人あたり30分～45分程度を目安に実施した。

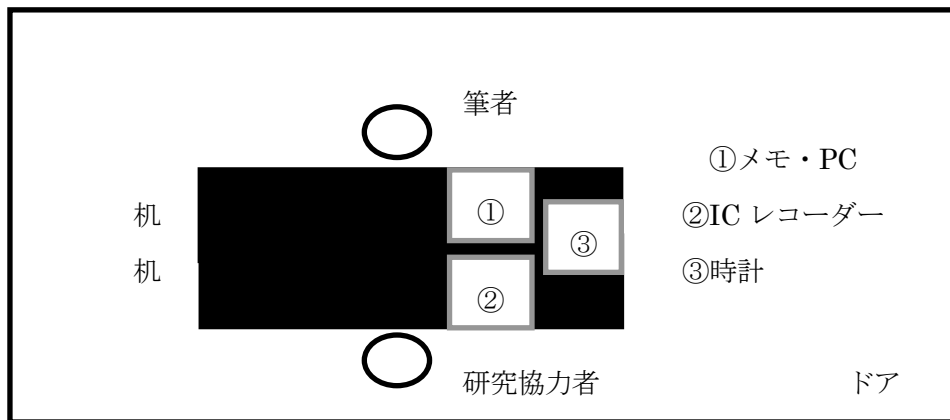


Figure 1 面接を行った部屋の様子

Figure1のように、面接時の配置は2つ机を並べて、向かい合うように筆者と研究観察者が座り、面接中は他人が入って来られないように配慮した(Figure1)。研究協力者の基本属性を確認後、適宜質問に移った。

### 3-4-2 データ分析の手続き

ICレコーダーに録音したデータを用いて逐語録を作成した後、以下の手順によってM-GTAを用いてデータを分析した。①逐語録をもとに、各対象者の内容と流れを把握する。②一番多彩な内容を語ったBさんを最初の分析焦点者に設定し、分析テーマと関連する箇所に注目して概念の生成を始める。③分析ワークシートを作成しながら概念を生成する。そこには概念名・定義・具体例(ヴァリエーション)・理論的メモを記入する。④同時並行的に他の具体例をデータから探してヴァリエーションの豊富さを確認する。必要に応じて、再定義や概念の再命名を行う。⑤概念の生成にあたって、類似例と対極例の2方向で検討し、絶え間なく継続的比較分析法を行う。解釈が恣意的に偏ることを回避する。⑥順次、分析焦点者を移していき、必要があれば概念を生成し、最終的に全てのデータ分析を完了する。概念ごとに理論的飽和化を判断する。⑦生成された概念を概念同士で比較し、関係のある概念を複数集めてカテゴリーを生成する。⑧カテゴリー同士の関係を検討し、全体の関係とプロセスを表す結果図を作成する。

### 3-4-3 理論的飽和化

M-GTAは分析を終了する際に理論的飽和化を判断する。まず、個々の概念の完成の程度を分析ワークシートを使って確認した。第一に、生成した概念が十分なヴァリエーションに支えられているかどうかを確認した。第二に、生成した概念やカテゴリーがデータと適合しているかどうかを確認した。必要があれば、定義や概念を、具体例に基づいた内容に修正を行った。第三に、生成した概念について、それぞれ対極例が存在しているかどうか

かを確認した。対極例が確認された場合は、それをヴァリエーションとする概念を新たに生成した。この場合は1つのヴァリエーションであっても概念として残すことにした。以上の内容に該当した概念には、理論的飽和化の判断を行い、概念の生成を終了した。

#### 4 結果

##### 4-1 結果図

M-GTAによって最終的に45の概念を生成し、14のカテゴリーにまとめた。生成したカテゴリー、概念、定義はTable4にまとめた。フリースクールの利用・進路に着目して、フリースクールでの進路決定のプロセスをたどろうとした。そのプロセスや概念の指す事実・心理的変容に着目し、カテゴリーごとの関係を結果図に表した。なお、Figure2の結果図や以後の本文において、●○○は概念名、<○○>はカテゴリー名、《○○》はコアカテゴリー、細い矢印は変化の順序、太い矢印は因果関係、両矢印は対極関係をそれぞれ表している。

Table4 生成した概念およびカテゴリーと定義

カテゴリー	概念名	定義
不登校～フリースクールに通う前の生活。	家で目的のない生活。	家にいながら、特に意味や目的を持たずに生活していること。
保護者や支援者からのフリースクール勧誘	親に勧められる。	フリースクールみなもの発見・通うにあたって親の勧めがあったこと。
	他のフリースクールや支援者に勧められる。	フリースクールみなもの発見・通学にあたって、他のフリースクールや児童相談所・市役所などの諸機関からの勧めがあったこと。
入会初期の活動	一人でできることをする。	入会の初期段階では、子どもは一人でじっとしていたり、消極的に一人でできるような活動を行う。
	スタッフと一緒に活動する。	みなものスタッフ・ボランティアと一緒に活動している段階。このときは子どもとの活動はまだない。
子どもの心理<入会初期>	家の外へ踏み出せた喜び。	家の外から出れたことに、まずは一定の達成した気持ちを感じる。
	受け入れてもらえるか不安。	入会初期では、フリースクールで日々を過ごせるか、学校の場合と同様にここにも登校できなくなるのではないかと不安を感じていること。

	自分を強く見せようとする。	自分を強く見せ、短所や受け入れがたい自分をとにかく隠そうとする。
子ども同士の活動の参加	共通点を持つ人との出会い。	共通の趣味や話題を持つ人と出会い、それを基に会話や交流をしている。
	ツールを介したコミュニケーション。	何らかの道具・ツールを使いながら、またはそれを介しながら人と交流していること。
	自分の好きなことに取り組む。	みなもで自分のやりたいことをみつけ、それに取り組む。
	人間関係の拡大。	会話相手や人間関係を持つ相手が増加する。それによって、新しい価値観が芽生える
	外出イベントへの参加。	フリースクールにおける外出を伴う活動に参加すること。
辛いことの経験	辛いことの経験。	みなもにおいて、何らかの辛い経験を味わうこと。
活動を通じての心理的变化	居場所を感じる。	自分を認めてくれる、認められたような声掛けやスタッフによって子どもは受け入れられていると感じること。
	コミュニケーション能力の上昇・回復を感じる。	コミュニケーションを行う能力や人と交流する力が回復・上昇すること。もしくは当人がそう思うこと。
	対人恐怖の減退。	いじめなどによって生じた人に対する恐怖心が、フリースクールの活動を通じて減退していくこと。
	自分の短所や弱さを表出する。	子どもの持つ短所や弱さを認め、他者にもそれを自ら表出したり、相談できたりするようになる。
	もとの自分に戻ったと思う	回復や上昇の結果、年相応の態度・行動が見られるようになる。もしくは本人がそう思ったと感じていること。
	受動的態度から能動的態度になったと思う。	人にやってもらうという態度・行動から自ら積極的に色々なことにチャレンジできるようになる。もしくはそう思ったと本人が思っていること。
スタッフの対応	気にかけていることのアピール。	何らかの事象をきっかけにみなもに来づらくなった子どもに対しては電話などを行い、気にかけていることをアピールする。一方で、それ以上は踏み込まない。
	子どもの逆戻りを認める。	次のステップに向かった子どもが再び前のステップに逆戻りすることがあるが、そのときにはそれを認め、子どもの心が落ち着くまで待つてあげることが必要であること。
	一人の人間として尊重する。	その子が自信を持っていることを見出し、それに対して敬意をもって付き合うこと。

	押しつけではなく、選択肢の提示。	トラブルや葛藤を抱えている子どもに対して、指導的対応を行うのではなく、他の選択肢や方法を提示するアプローチを行う。
	「一人一人の考え方」は異なるもの。	一人一人の考え方や思想は異なるものであり、自分なりの考え方を持っていていいことを伝えること。同時に子どもたちの考え方を尊重すること。
	スタッフを介して子どもとつながる。	スタッフと一緒に行動しているうちに、徐々にスタッフがその子どもを他の子どもとつなぐようになる。
	本人の「語らない意思」の尊重	初期段階では、自分の不登校に至る経緯や過去のことを、語りたくない場合はそれを尊重すること。
	できないことは言わせない。	子どもたちが、人の顔色を伺って「自分にできないこと」を言ってしまうようにし、自信の喪失や罪悪感のもとになる要素を断ち切る。
	「一緒に楽しもう」というアプローチ。	イベントや進路探しにおいて、指導ではなく、スタッフと楽しみながらやろうというアプローチを行うこと。
	「女子は自衛すべき」をお願いする。	性犯罪から身を守る手段を教える必要があること。それを指導ではなく、お願いする形で教えること。
	次のステップに向かうためのアプローチ。	元気を取り戻した子供に対して、次の進路へ向かうための選択肢を提示する必要があること。
変わらない思い	受験年齢の意識と焦り	受験年齢(15歳・18歳以上)に至り、それを意識して早く自分の進路を見つけなければならないと考えること。
	さすがに高卒資格はあった方がよい	進路を見つける前から、「とりあえず」という気持ちで高卒認定試験を受け、高卒資格を取得していること。
	親の意向を意識する	子ども自身の将来に対する親の思いや不満を感じ、それによって進路を見つけなければならないと考えること。
進路を見つけるきっかけ	好きなことからの進路発見。	好きなことを取り組んだ結果、それが進路につながっているケースがある。
	身近な体験によるやりたいことの発見。	身近な体験・親しい大人の職種によって、やりたいことや将来の進路を形成していること。
	進路選択に対して自信をもつ。	いずれ次の進路を見つけなければならないという意識に対して、自分もそれを達成できると思い始めること。
勉強に対する意識の強化。	勉強・学習が「できる」という意識。	勉強・学習をしなければならないという意識に対して、自分もそれを達成できると思い始めること。

	学習・勉強による自己肯定感の上昇。	学習によって、子どもたちの自己肯定感や自尊心の向上が起きていること。
スタッフの進路・学習支援。	「好きなこと」を進路につなげるアプローチ。	長い時間をかけて、子どもの好きなことが大学などの進路において、どのように役に立つ可能性があるのかを提示し、進路につなげていく。
	ほめる学習の必要性。	子どもの長所を見つけ、それをほめることによって学習へのモチベーションアップを図る。
進路選択に向けた活動	積極的なオープンキャンパス・オープンスクールへの参加。	高校進学・大学進学を考えていたことが、「オープンキャンパス・オープンスクールへの参加」という行動に変化している。
	学習の時間や塾に参加する。	進路の準備を目的にフリースクール以外の施設に通うこと。
みなもの課題	フリースクールと社会のギャップの穴埋め。	フリースクールでの生活と一般的な社会生活には、ギャップがあり、そのギャップを解消していく支援が必要である可能性がある。
	フリースクールの卒業によって途切れる支援。	発達障害や不登校によるトラウマを抱えた子どもは、時には卒業後も支援を続けていく必要があるケースがあるが、フリースクールの場合はそのアフターケアが不十分であること。



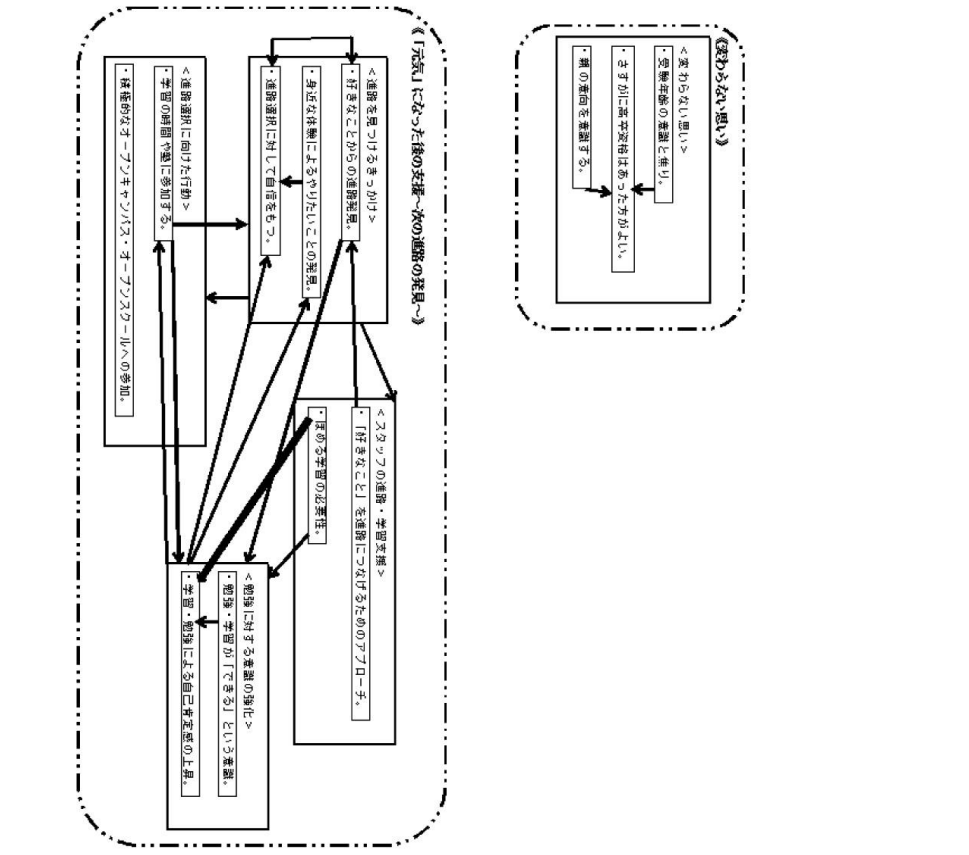
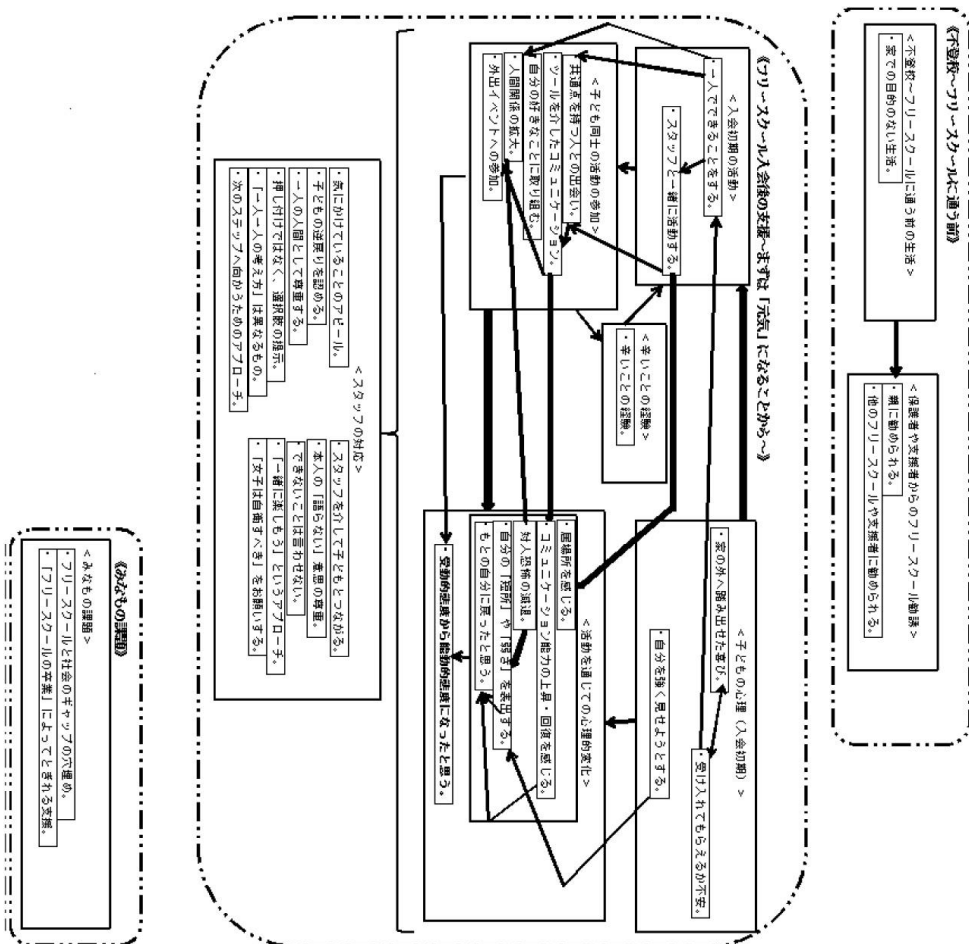


Figure2 フリースクールみなもでの過ごし方と変化の結果図

## 4-2 コア概念の生成

順次各事例の分析を進める中で、全ての研究協力者が、**コミュニケーション能力の上昇**や**回復を感じた**ことを挙げていた。例えば、bさんは「うーん、来たときは前(以前のみなも)の3階にあたる場所で静かな所でじっと過ごしていて、3ヶ月くらい…。人に関わるのがあまり好きじゃなかったんで。…(中略)…その、比較的なんか、言い方難しいけど大人になったのかな？なんていうの、なんていうのかな、ちゃんと学校に行っていたわけじゃないから、人と会話するのが苦手やったんやけど、それが克服されたみたいな感じはあるかもしれない。」と語っていた。これについては予備調査で行った卒業生たちにも同じ傾向が見られた。特に②さんは「行動力は上がりましたね。もともとインドア派で外でバーベキューとかするキャラじゃなかったのに。また明るくなりましたね。…(中略)…例えば、しゃべるときに。(フリースクールに来る前は)ガンガン受け身やったんですけどね、だれかにしゃべってもらうまで待っているっていう。それが自分で問いかけるっていう積極的に行動できるようになりましたね。もともとはがっつり受け身やったんですよ。」とフリースクール内での自身の変化について感じることを語っていた。分析を行った結果、もともと受け身だった性格・行動が、積極的に行動できるような性格になったという変化を表す概念「**受動的態度が能動的態度になる**」を生成した。さらに、実際に能動的になったかどうかよりも、調査に協力した子どもたち本人が「**能動的になった**」と感じていることが、進路を見つけるという次のステップへ移行する上で重要であること、インタビューによって得られたデータから実際に行動力が上がったのかどうかを客観的に判断することは困難であると考えられたことから、調査協力者たちが思っていることであることを強調するために概念を「**受動的態度が能動的態度になったと思う**」と修正した。進路を見つけるきっかけにはいくつかのパターンが存在すること(後述)が分析の中で分かったが、そのいずれもが、子どもたちが能動的になっていることが前提として起こっているものであった。すなわち、「**受動的態度が能動的態度になったと思う**」は、フリースクールみなもにおける第1の支援である「**元気**」を取り戻す支援の到達点であり、第2の支援である進路を見つける支援の前提条件であるといえる。以上から、「**受動的態度が能動的態度になったと思う**」を本分析のコア概念として位置づけた。

## 5-3 全体の変容プロセス・カテゴリーごとの説明

### 5-3-1 《不登校～フリースクールに通う前》

子どもたちは、複合的な原因によって不登校になっている。今回の調査では、学校でいじめを受けたことや人間関係が上手くいかなかったことが主として子どもたちから語られた。また、その背景に発達障害などを抱えていたケースも存在した。子どもたちは不登校

になった後は、基本的にどこにも通うことはなく「家での目的のない生活」を送っていた。家での生活は、本人にも何のためにやっているのかが分からないもので、目的を伴わないものであった。一部の子どもたちは、他のフリースクールや市役所、児童相談所など、不登校に関連する機関に通所していたという語りもあったが、通所の頻度は高くなく、時間を家で過ごしている場合が大半であったが、そのような子どもの様子を見た保護者や関係機関の支援者たちは、フリースクールを勧めるようになる。＜親や支援者からのフリースクール勧誘＞を受けた子どもは、受動的ながらもフリースクールに見学に行く決心をする。

#### 4-3-2 《フリースクール入会後の支援～まずは「元気」になることから～》

フリースクールみなもに通い始めることになった子どもたちは、「家の外に踏み出すことができた喜び」とフリースクールみなもに「受け入れてもらえるかどうか不安」という対極した思いを抱えていた。このような不安や、学校でのいじめや人間関係のトラブルなどの影響が原因となって、入会初期には、漫画を読んだり、時にはじっとしていたりなど「一人でできることをしたり」、「スタッフと一緒に活動したりして、他の子どもとは関わることができないでいた。また、入会初期の子どもたちと関わったスタッフたちは、子どもたちが自分が以前学校などでいじめを受けた経験などをしゃべろうとせず、自分が優位に立てるような話題を中心に語るといった、「自分を強く見せようとする」ような場面がしばしば見られたことを語っていた。これらの子どもたちに対して、スタッフは「本人の「語らない」意思を尊重し、「一人の人間として尊重する」ことを心掛けていることを語っていた。その子どもが自信を持っていることや得意としていることについて、子どもが自由に話したり、やりたいことができるように環境を整え、少しずつでも自信がつくように配慮している様子が語られた。また、何かスタッフが子どもにやってもらわなければならないことがあった場合、一方的にやらせるのではなく、「一緒に楽しもう」というアプローチを行い、両者が主体的にやっていることをアピールしているという語りも得られた。一方、「できないことを言わせない」ように注意を払い、できないことを約束し、結果的にできなかったことが本人の自信の喪失につながらないように配慮したケースも存在した。これらの環境が、子どもたちがフリースクールみなもに受け入れられていると感じ、「居場所を感じる」ことにつながる。

子どもは、徐々に一人での活動やスタッフとの活動から、＜子ども同士の活動に参加＞するようになる。フリースクールみなもに通う頻度が高まるにつれて、自分と同じ趣味を持つなど、「共通点を持つ人との出会い」が起こる。共通の趣味には、カードゲームやテレビゲームなどがあるが、それらを話題のためのツールにしながら、「ツールを介してのコミュニケーション」を行うようになる。この結果、「人間関係が拡大」していく。また、スタッフが、「2人でやっている遊びに、他の子どもも入れてあげよう。」と提案し、「スタッフを介して子どもとつながる」ケースもある。

このように、他の子どもと話すことができたという体験を通じて、**対人恐怖が減退する**。同時に今までコミュニケーション能力がない、人とコミュニケーションをとることができなくなったと思っていた子どもたちが、自分も人とコミュニケーションをとることができるようになったと思うことができるようになり、**コミュニケーション能力の上昇や回復を感じる**。また、上記のような子どもたちにとっての負い目をほかの子どもやスタッフにも話せるようになり、**自分の「弱さ」や「短所」を表出できるようになる**。例えば、aさんは、Aさんに対して「昔の自分はコミュニケーションに障害があって人とほとんど話さなかった。」と話している。これらの変化を通じて、**コミュニケーション能力の上昇や回復を感じたり**、**もとの自分に戻ったと思ったり**することで、子どもたちの行動にも変化が生じる。今まではテレビゲームやカードゲームなど、フリースクールの内部にとどまっていた活動が、日本橋に行く、京都市へ花見に行くなどの**外出イベントへの参加**を伴う活動に変化し、フリースクールの外部にも拡大していく。これらは誰から強制されたものではなく、自らの意思で行くことを決定している。場合によっては、自分の意見を述べるができるようになったり、やりたいことをスタッフや子どもたちに話すことができるようになったりすることもある。子どもたちのあらゆる活動において、それまでの**受動的態度が能動的態度に変化している**ようにスタッフからも感じられるようになり、子ども自身も自分がそのように変化したと思うことができるようになる。この段階に至ると、子どもたちは、入会初期と比較して「元気」を取り戻している。ここでは、子どもに能動的態度が見られるようになった、もしくは子どもが「自分は能動的になった」と感じた段階を「元気」になった段階と位置付けることとする。

子どもが「元気」になるまでのプロセスは、順調に進むものではなく、漸進的動揺を伴っている。＜子ども同士での活動への参加＞をするように至ったら、その前段階にあたる**1人でできることをしたり**、**スタッフとだけで活動したり**することは全く消失するというものではない。むしろ、フリースクールで起こったトラブルや葛藤などの＜辛いことの経験＞によって、前段階に戻ったり、フリースクールを休んだりすることもある。このような子どもに対して、スタッフは電話などを使って**気にかけていることのアピール**を行いつつも、フリースクールに再度通うように強要はしない。むしろ、そのような**子どもの逆戻りを認めて**、辛いときには休んでもよいことを伝えている。そして、子どもたちは気持ちが落ち着いたら、再びフリースクールに通い始め、次の段階へと進むことができるようになる。

#### 4-3-3 《変わらない思い》

前述の通り、フリースクールにおいて子どもたちはさまざまな過程を経ながら、受動的な考え方・態度から能動的な考え方や行動ができるように変化している。それに伴って、対人関係や不登校であることなどに対するネガティブな感情も減退し、自分

に自信を持つようになっていく様子が語りの中で観察された。一方、フリースクールの活動を通じて変わらない思いも持っており、特に学習に関連する事象に関しては変化しないことが判明した。フリースクールみなもでは、ある年齢に達したら受験や進学、進路選択を強制させることはしていないにもかかわらず、中3や高3など、一般的に進路を考えて受験する時期に到達すると、進路を考えなければならないという「受験年齢の意識や焦り」が生じている。bさんやdさん、eさんは、進路を探そうとした直接のきっかけは自分の年齢であることを語っており、特にeさんは中学卒業年齢でフリースクールみなもが提携しているサポート校である松陰高等学校に通い、18歳という一般的な高校卒業年齢の時点で卒業する見込みである。bさんについても、自分の年齢から進路を意識したことを語っており、高3年齢に達してからは特にその不安を抱えていたことを語っていた。

彼らがフリースクールに通っていても変わらない思いを抱えていることの背景には「親の意向を意識している」ことが伺われた。保護者は、フリースクールに通うことで、状態が改善されつつあることを認めながらも、一般的な子どもたちが学校に行き勉強しているのに対し、自分の子どもたちはフリースクールで遊びを中心とした活動を行っていることに不安を感じていた可能性があることが考えられる。少なくとも、語りの上では、保護者は自分の子どもが高卒資格を何らかの形で取得することに肯定的であることが分かった。

これらの心理的過程を経て、フリースクールみなもに通う多くの子どもたちが、「さすがに高卒資格はあった方がいい」と考え、高卒認定試験を受けるもしくはサポート校に通うなどの選択を行っている。実際に研究に協力してくれた子どもたちにおいても、既に高校を卒業しているdさんを除き、aさんは高校合格を志しており、bさんは高卒認定試験を受験中であり、cさんやeさんはサポート校に通っている、といずれもが高校卒業の資格を取得しようと試みている。

#### 4-3-4 《「元気」になった後の支援～次の進路の発見～》

前述の支援を通じて、「元気」になった子どもたちには、「次のステップに向かうためのアプローチ」を行っていく必要がある。これまでのステップは、「元気」になることに重きを置いていたのに対し、次のステップは子どもたちの目をいかに進路に向けていくかに重きを置く。例えばAさんは、今までaさんが話してくれた車のデザインの話で、「なぜこの車の会社はこのようなデザインを創り上げたのか」など仕事の話に結び付けている。

子どもたちが「進路を見つけるきっかけ」は大きく3つのパターンに分けられた。1つ目は、フリースクールで「自分の好きなことに取り組んだ結果、それに対する探究心などから将来の進路につながるという好きなことからの進路発見」である。これにはaさんやbさんが該当した。2つ目は「身近な体験によるやりたいことからの発見」が進路選択につながるケー

スである。フリースクールの現場で働くスタッフの姿や親しくなったボランティアスタッフの職業が、子どもの将来のキャリアに影響する様子が語られていた(dさん、eさん)。また、ある出来事が契機となって、進路選択につながるケースも存在した(cさん)。3つ目は、**進路選択に対して自信をもった**ことで、自分の年齢や進路を見つけなければならないという意識が、進路を見つけようという行動につながったパターンである。《変わらない思い》の中にも存在する概念であるが、「元気」になるまでは、進路選択について意識できても行動に移すことはできなかった。しかし、フリースクールの活動を経て、色々なことを達成し、能動的になったと感じるようになった子どもたちは、進路を探ることができると感じるようになり、進路を選択・決定するという行動を実行する(予備調査の②さん、③さん)。

フリースクールみなもの子どもたちの進路の大半は、高校・大学・専門学校等への進学であるが、進学を希望する子どもたちは、どこかの段階で準備の学習に取り組み始める必要がある。**好きなことからの進路発見**をした子どもの場合、進路発見をした結果、＜勉強に対する意識の強化＞が起こり、**学習の時間や塾に参加したりする**ようになる。**身近な体験によるやりたいことの発見**・**進路選択に対して自信をもった**子どもの場合、進路選択よりも先に＜勉強に対する意識の強化＞が起こっていた。前述と同じく、フリースクールの活動を経て色々なことを達成し、能動的になったと感じるようになった結果、**勉強・学習が「できる」という意識**を持つようになり、**学習の時間や塾に参加する**ようになる。このとき、スタッフが**ほめる学習の必要性**を感じて、それを行った結果、それが**学習・勉強による自己肯定感の上昇**につながっていることが語られていた。このように、子どもたちの学習に対するモチベーションの強化が行われた結果、**進路選択に対しても自信を持てる**ようになったり、**身近な体験によるやりたいことの発見**を促進したりしている可能性が推察された。進路を見つけた子どもたちは**能動的・積極的にオープンキャンパスやオープンスクールに参加している**様子が語られた。**身近な体験によるやりたいことの発見**の場合は、《変わらない思い》とフリースクールでの実際の活動が、どちらも直接的あるいは複合的に関与していると考えられる。

＜進路を見つけるきっかけ＞の3つのパターンにおいて、いずれの場合も、子どもたちが**受動的態度から能動的態度に変化した感じる**ことが前提になっていることが推察された。**好きなことからの進路発見**の場合、フリースクールにおいて積極的に自分の好きなことに取り組んだことが背景になっており、フリースクールでの実際の活動が直接的に進路に結びついている。一方、**進路選択に対して自信をもった**場合、進路に対する《変わらない思い》に対して、子どもたちが「できるだろう」と感じたことが直接のきっかけになっている。この場合、フリースクールでの実際の活動は、進路については間接的に関与しているといえる。

#### 4-3-5 《みなもの課題》

研究協力者の語りから、2点の課題が発見された。1点目は「フリースクールと社会のギャップの穴埋め」である。フリースクールみなもは、開室時間が午前11時と学校と比べて遅い上に、出欠や遅刻・早退なども自由である。しかし、進学先の学校では登校時間も早い上、自由に遅刻・早退することはできない。進学前と進学後で、環境の変化が大きく、そのギャップをいかに埋めていくかを考えていく必要があることが指摘された。2点目は「フリースクールの卒業」によって支援がとぎれてしまうことである。前述のギャップの大きさから、子どもたちが進学先の学校に定着して通えるような支援が必要であるといえる。また、発達障害を抱える子どもの場合、進学後も何らかのサポートが必要であることも多い。しかし、フリースクールを卒業してしまえば、少なくともフリースクールがそのような支援を行うことができない。進学後の支援をどのように構築していくかを考えていくことが必要であるといえる。

## 5 考察

### 5-1 自己効力感との関連

本研究の分析においては、進路を選択する段階へと移行するにあたっての直前の段階、また「元気」になるにあたっての到達点として、「受動的態度から能動的態度になったと感じる」をM-GTAのコア概念として位置づけている。この段階に至ることによって、子どもたちは、これまでも潜在的に意識していた学習や進路に対する意識をさらに強め、学習や進路選択についての行動もできるようになると考えた。ところで、これらは文字通り、実際に「能動的に変化したかどうか」を考慮せず、語った本人がそのように思っていることが重要であることを強調している。そのため、これらには自己効力感と関連があると我々は考えた。自己効力感(self-efficacy)とは、Bandura(1977)によって提唱された概念であり、ある課題を達成できる可能性についての自分自身の判断を指す。これは、課題遂行のために必要な技能を持っているかにかかわらず、できると思うかどうかを問うものである。自己効力感は行動に直接的に影響を与えるとされており、ある特定の課題に対する自己効力感が高ければ、その課題に対して頻繁に働きかけ、それが良い結果にもつながり、逆に自己効力感が低いと、過剰に失敗を恐れたり、課題を遂行する上での障害に耐えられないために課題に応じた行動を避けるようになり、従って得られる結果のレベルも落ちることが予測される(廣瀬 1998)。また、Banduraは、自己効力感を高めるための4点の契機があることを指摘した。1点目は「達成体験」であり、自分自身が何かを成功させたり、達成したりした経験を指す。2点目は「代理体験」であり、自分以外の他人が何かを成功したり、達成したりした経験を指す。3点目は「言語的説得」であり、自分に達成するための能力があることを言語的に説明されることを指す。4点目は「情緒的な喚起」であり、緊張や不安を感じる際に経験する生理的な興奮を指す。

本研究では具体例の少なさから、概念として生成することはできなかったが、「他の子どもを見て受け入れられていると感じる。」という自己効力感における「代理体験」に位置づけられる語りがあった。また、研究協力者のインタビューの中で「友達を作りたい」などの思いを抱え、実際に成功しているエピソードなど、「達成体験」を得ている様子も見受けられた。フリースクール内部での成功体験が外出を伴うイベントへの参加、さらには勉強や進路発見に対する「できるだろう」という意識につながっていることから、達成体験によって自己効力感が上昇していることが伺える。「言語的説得」に位置づけられる概念としては、押しつけではなく、選択肢の提示や「一緒に楽しもう」というアプローチ、ほめる学習の必要性が位置づけられると考えられる。できないことに対して「こういう方法を用いればできるのではないか」と提示したり、「一緒にやってみたらできるのではないか」というアプローチを行うことで達成するための能力があることが説明できているのではないかと考察した。「情緒的な喚起」については、コアカテゴリーの《「元気」になった後の支援～次の進路の発見～》が位置づけられると考えた。学習やオープンキャンパス・オープンスクールの参加など、今までとは異なる空間に参加することで、適度な緊張や不安を感じる事が指摘された。以上から、本研究の全体のモデルの結果は Bandura の自己効力感によって説明ができると我々は考えた。しかし、「言語的説得」や「情緒的な喚起」は、他の2点ほどには、子どもたちが本当にそのような体験をしているのかどうかを判断することができなかったため、さらなる検討が必要であるといえる。

## 5-2 子どもの心の揺れを尊重する支援の重要性

全体のモデルでは、一般的傾向として受動的態度から能動的態度になったと感じるに至るまでに、まずは一人でできることをする、スタッフと一緒に活動する、次に子ども同士の活動に参加し、その中で最初はツールを介してコミュニケーションをとっていた状態が、日常的な会話もできるようになり、最終的には外出イベントに参加するようになるという順にフリースクールでの実際の活動が変化していることを示した。しかし、これらは前進的動揺を伴う。「達成体験」をしている一方、「達成できなかった体験」や辛い体験・葛藤を抱えるような体験もしている。それによって前の段階に戻ったり、場合によってはフリースクールをしばらく休んだりすることが見受けられる。しかし、フリースクールでは、子どもたちの逆戻りを認め、それによって子どもたちの心の揺れが生じていることに理解と共感を示し、無理に元に戻すことを強要しない。むしろ、子ども同士関係を持つことに辛さを感じれば、再度一人でいたり、仲の良いスタッフと一緒にいたりすることを認め、子どもが再び子ども同士で関わりたいと思い、行動できるようになるまで待つ。これらの心の揺れを許容してい



ることで、ネガティブな気持ちを落ち着かせ、もう一度色々なことに取り組みたいという気持ちを取り戻していると我々は推察した。

したがって、フリースクールでは本人の心の揺れを否定したり、無理に次の段階へ移行するように促したりはせず、後退と前進を繰り返しながら、少しずつ本人のペースを尊重しながら、**受動的態度から能動的態度になったと感じる**に到達させることが重要であると考察された。学校の場合、卒業する年齢や年齢ごとの達成すべき課題も決められているため、個人のペースに合わせた支援を行うことは難しい。しかし、フリースクールみなもにおいては実際に18歳を過ぎた後でも進路を選択し、フリースクールを卒業したケースが存在することから、このようなニーズに対しても許容することができるフリースクールが、子どもたちの心の揺れを尊重していく姿勢を示すことが必要であるといえるだろう。

### 5-3 勉強や進路に対する《変わらない思い》を維持し続けることの重要性

本研究の分析によって、多くの場合、進路を探そうと考えるきっかけの前提には、親の意向を意識したり、自分の年齢を意識するなどの《変わらない思い》を抱えていたことがあることが推察された。しかし、今回の分析上において、M-GTAの生成概念「**進路選択に対して自信をもつ。**」に至った子どもたちは、進路選択を「やりたいからやったこと」ではなく、「やらなければならないという思いがあったからやったこと」と考えていた。むしろ、このパターンの進路選択の場合は、第一に「やらなければならないこと」という考えが前提にある。フリースクールでの活動を通じて、能動的態度や「自分はやれるだろうという感覚」を持ち合わせたことで、進路選択についても「自分はできるだろうという感覚」を有するようになった。そして、「やらなければならないこと」という思いを抱えている背景にはコアカテゴリーとして生成された「変わらない思い」を持ち続けていることがであると推察した。つまり、これらの思いを排除することは、かえってフリースクールの子どもたちが進路選択に至らなくなる可能性が考えられる。

「**身近な体験によるやりたいことの発見**」の場合も、あらかじめ勉強に対する《変わらない思い》を持っていたことが進路選択を促している可能性が指摘された。少なくとも、進路を実現するためには何らかの勉強を行う必要がある。やりたいことを見つけた時点で、ある程度勉強が進んでいたことが、進路選択もできるだろうという意識につながっていることが考察された。むしろ、やりたいことを見つけたとしても、勉強に対する意識や「できるだろう」という考えの強化がなければ、かえって進路選択から遠ざかってしまう可能性も考えられる。

したがって、フリースクールにおける進路選択は、本人らの「やらなければならないこと」という「変わらない思い」に対して、「自分はできるだろうという感覚」を

持った時に生じてくるものだと考え、フリースクールではその思いを尊重していく取り組みが必要であるのかもしれない。ただし、子どもたちのペースに従った変容を許容することも必要であるため、きめ細かい調整を行っていくことも必要である。いずれにせよ、今後フリースクールにおいて、このような彼らの思いをどう捉えていくのかを議論することが必要であると考えた。

これらの生成概念の対極に位置しているのは、「好きなことからの進路発見」である。これについては、フリースクールの活動が進路に直接的に関係しており、勉強や進路に対する《変わらない思い》との関連性は指摘できなかった。勉強・進路に対する意識が著しく減退している子どもに対しては、無理にそれらに対する意識を持たせようとせず、彼らの好きなことから、進路に結び付ける支援が必要になってくるといえる。子どもの様子を捉え、適切なアプローチのパターンを考察し、柔軟に対応していく必要があるといえる。

#### 5-4 今後の課題

本研究では、フリースクールみなもの子どもたちの中でも、比較的成功的な体験をしながら、進路決定にも成功してフリースクールの卒業を目前に控えている子どもたちや、比較的継続して円満に通い続けることができている子どもたちの語りを基にして、フリースクールの研究を行った。その結果、本研究の目的に照らしてモデルを提示することができた。また個人ごとの具体的な過程での配慮事項においても、前進的動揺の問題などの指摘ができた。また分析の中で、子どもたちは必ずしも順調に成功した体験を積み重ねていくのではなく、失敗や葛藤を伴いながら心理的変容をしていく過程が明らかになった。しかし今回の分析では、より明確に子どもたちがどのような場面でどのような葛藤を抱えたのかを明らかにすることはできず、この点には課題が残った。

また、前述の通り本研究における全体のモデルの結果は、Banduraの自己効力感によって説明ができるとしている。そのため、この仮説が本当に正しいのかを検証することが必要となった。次なる研究の方向性としては、Bandura(1977)の自己効力概念を指標に、自己効力概念に関する尺度を用いて、子どもたちがフリースクールに通っている期間と子どもたちの自己効力の変化の相関関係を検証するなど、量的な研究を行っていくことが必要であるだろう。フリースクールという子どもの「居場所」における進路支援や活動を Bandura の自己効力感に位置づけることができるかどうかを検証することが必要であると考えた。

文献

- ・ Bandura, A. (1977). Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215. (原野広太郎(訳). (1979). 社会的学習理論. 金子書房.)
- ・ 藤原康浩 . (2010). 居場所の定義についての研究. 関西学院大学教育学研究科紀要「教育学論究」, 2, 169-177.
- ・ 廣瀬英子 . (1998). 進路に関する自己効力研究の発展と課題. *教育心理学研究*, 46, 343-355.
- ・ 伊藤幹也. (2013). 将来を自ら切り拓いていくことができる児童・生徒の育成 — 児童・生徒の自己効力感を高めるキャリア教育の推進を通して—. 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, 4, 301-310.
- ・ 河内勇貴・上原秀一. (2013). 不登校児の人間関係作り—適応指導教室の参与観察を通して—. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 36, 299-306.
- ・ 木下康仁. (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂.
- ・ 北澤毅・古賀正義(編). (2008). 質的調査法を学ぶ人のために. 世界思想社.
- ・ 児島邦宏・佐野金吾. (2006). 中1ギャップの克服プログラム. 明治図書.
- ・ Merriam, S.B. (1998). *Qualitative Research and Case Study Applications in Education*. Jossey-Bass. (堀薫夫・久保真人・成島美弥(訳). (2004). 質的調査法入門. ミネルヴァ書房.)
- ・ 文部科学省初等中等教育局長. (2003). 不登校への対応の在り方について. 文部科学省. ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/04121502/021.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/021.htm)). 最終更新日 2003年5月16日. 最終閲覧日 2014年1月29日.
- ・ 文部科学省初等中等教育局児童生徒指導課. (2003). 不登校への対応について. 文部科学省. ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/futoukou/main.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/futoukou/main.htm)). 最終更新日不明. 最終閲覧日 2014年1月29日.
- ・ 文部科学省初等中等教育局児童生徒指導課. (2012). 平成 23 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について. 文部科学省. ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/09/\\_icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/_icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751_01.pdf)). 最終更新日 2012年9月11日. 最終閲覧日 2014年1月29日.
- ・ NPO 法人フリースクール全国ネットワーク(編). (2009). フリースクール ボクらの居場所はここにある!. 東京シュレー出版.
- ・ 岡本かおり・谷口清. (2009). スクールカウンセラー活動の継続を支える要因— M-GTA を用いた質的研究—. *人間科学研究*, 31, 161-172.
- ・ 奥地圭子・NPO 法人東京シュレー(編). (2000). フリースクールとはなにか 子どもが創る・子どもと創る. 教育史料出版会.
- ・ 西條剛央. (2007). SCQRM ベーシック編 ライブ講義 質的研究とは何か. 新曜社.